特集 男だから、女だから。

きっと、こうだろう。

こんな場面に出会ったら、あなたはどうしますか？ まずは、直感で選んでみてください。

CASE 01 「男の子なんだから、泣かないの。」



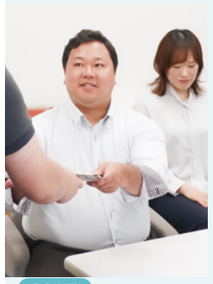
泣いている子どもに、
あなたならどんな声をかけますか？

- A 男の子なら、泣くなと言う
- B 女の子なら、なぐさめる
- C どうしたのか、理由を聞く

POINT

「男の子なら…、女の子なら…」と考えたとしたら、性別ごとに「こうあるべき」というイメージがあるのかもしれません。

CASE 02 「男性だから、お願いしよう。」



ある仕事で、リーダーを１人決めることになりました。候補は、男性と女性の２人。あなたなら、どうしますか？

- A 男性
- B 女性
- C 経験や本人の意向で決める

POINT

これまでの経験や得意なこと、本人がどうしたいのかなど、さまざまな視点から考えることが大切です。

CASE 03 「子どもが熱を出しました。」



仕事中、保育園から電話がきました。「発熱しました、お迎えをお願いします。」まず、誰に連絡がいくと思いますか？

- A 父親
- B 母親
- C 家族によって違うので分からない

POINT

家庭の役割は、それぞれ違います。「母親だから」「父親だから」ではなく、その家庭ではどうしているのかを知ることが大切です。

CASE 04 「将来、○○になりたい！」



子どもから、こんな言葉を聞きました。「将来、花屋さんになりたい！」あなたはどう感じますか？

- A 男の子なら、意外だと思う
- B 女の子なら、自然だと思う
- C 性別関係なく、応援したい

POINT

「この仕事は男性向き」「この仕事は女性向き」というイメージが、私たちの中にあるのかもしれません。

どの選択肢を選んだとしても、それだけで「良い・悪い」と決まるものではありませんが、なぜその答えを選んだのでしょうか。

私たちは、相手の性別や年齢、職業、見た目、これまでの経験、周囲から受け取った情報、社会の中にあるイメージなどから、知らないうちに「きっとこうだろう」「普通はこうだろう」「男性はこうだろう」「女性はこうだろう」と無意識に考え、決めつけてしまうことがあります。こうした「こうだろう」は、誰にでも起こり得ることです。

このような無意識の思い込みを「アンコンシャス・バイアス」といいます。

今号では、身近な「男だから・女だから」という思い込みを入口に、私たちの中にあるアンコンシャス・バイアスについて、一緒に考えます。

あなたの答えに無意識の思い込みがあるかも？

身近にある「思い込み」の例

家庭

「料理や子育ては女性が得意」
「家族を養うのは男性」
「子どものことは母親がよく分かっている」

仕事

「リーダーは男性が向いている」
「女性は事務や接客に向いている」
「女性は結婚、出産したら辞めるだろう」
「男性なのに、１年も育児休業？」

学校

「男子は理系、女子は文系」
「女子は運動が苦手」
「男子は我慢するもの」

メディア

「イケメンは仕事ができる」
「女性は買い物・美容が好き」
「男性は車・機械が好き」

その人を知る前に決めつけていませんか？

あなたは、なぜ、そう思った？

２ページで考えた４つの場面。あなたが選んだ答えには、どんな「こうだろう」が隠れていたでしょうか。

「男の子なら、泣かないだろう」
「男性だから、リーダーを任せたほうがいいだろう」
「女性なら、子どものことを優先するだろう」

そう考えたとき、その人自身ではなく、性別から相手を見ているのかもしれません。

私たちは、相手のことをよく知る前に、性別など、目に入った情報から「こういう人だろう」と判断することがあります。しかし、本当にそれでよいのでしょうか。性別だけでは、その人のことは分かりません。

家庭・学校・職場でも、私たちは知らず知らずのうちに「こうだろう」と相手を見ていることがあります。

「きっとこうだろう」
「普通はこうだろう」

そんな何気ない判断の中に、無意識の思い込みが隠れていることがあります。誰かを傷つけようとしているわけではありません。

私たちはなぜ、無意識に決めつけてしまい、相手のことをよく知らないままに「きっとこうだろう」と考えてしまうのでしょうか。

「きっと、こうだろう。」に、気付くには？

人は、毎日の生活の中で、経験や周囲から得た情報、社会の中にあるイメージなどをもとに、物事を素早く判断しています。これまでの経験から「こういうものだ」と考えること自体は、誰にでも起こり得ることです。そのため、相手のことをよく知らないうちに、「こういう人だろう」「普通はこうだろう」と無意識に決めつけてしまうことがあります。例えば、「男性だからリーダーが得意そう」「女性だから子育てを優先するだろう」といった考えも、その一つです。

では、こうした「きっとこうだろう」に気付くには、どうすればよいのでしょうか。大切なのは、「男だから」「女だから」と決めつける前に、「本当に、そうかな？」と一度立ち止まってみることです。自分の考えを振り返り、「この人はどう考えているのだろう」「本当はどうしたいのだろう」と、相手自身に目を向けてみましょう。

女性財団では、啓発紙「ぶっくばらんす」の発行やセミナーなどを通して、こうした思い込みについて考える機会をつくっています。思い込みをなくそうとすることよりも、まずは「自分にもあるかもしれない」と気付くことが大切です。

思い込みをなくすことがゴールではありません。思い込みに気付いたとき、どう対応するか。その選択によって、性別などの属性だけで判断せず、その人らしさに目を向けることができます。

interview



新潟県女性財団
小熊洋子（おぐまようこ）さん（写真左）
宗村瑞枝（むねむらみずえ）さん（写真右）



◀ 啓発紙「ぶっくばらんす」



過去に開催したセミナーの様子 ▶

「きっと、こうだろう。」を変えていく。

株式会社 氏田組の取り組み

「建築・土木の仕事は男性向き」「現場で働くのは男性が中心」。そんなイメージを持っていませんか？ 株式会社氏田組では、建築・土木の両部門で女性の積極的な採用を進めています。性別による思い込みにとらわれず、一人ひとりの希望や得意なことに目を向けると、働き方や活躍の可能性が広がります。建築・土木の現場で働く山田さんと大平さん、会社を経営する波潟社長に、仕事の中で感じてきた「当たり前」や、誰もが活躍できる職場に向けた変化について聞きました。



●株式会社氏田組 代表取締役社長
波潟智則（なみがたともの り）さん



●建築部 部長
山田容子（やまだようこ）さん



●営業管理部 主任 建設ディレクター
大平悠佳梨（おおだいらゆかり）さん

――入社時と比べ、仕事への向き合い方や職場環境に変化はありますか。

波潟　私が11年前にこの会社に来たときは、女性の正社員は2人だけでした。現在は32人のうち9人が女性で、そのうち6人が現場で活躍しています。人手不足という背景もありますが、女性も現場の大切な戦力として活躍できる会社でありたいと考えていました。「男だから」「女だから」と決めつけず、一人ひとりの適性や意欲を大切にし、それぞれが力を発揮できる環境づくりを意識しています。性別に関係なく、誰もが活躍できることが会社の力になると感じています。

山田　入社した頃は、「建設業の現場で働くのは男性」というイメージがありました。私は事務職から現場の仕事に移りましたが、実際にやってみると、経験がなくても、周りに教えてもらいながら覚えていけることが分かりました。

大平　現場の仕事に対して、当初は不安がありました。最初は分からないことばかりでしたが、上司が一つひとつ教えてくれたことで、少しずつできることが増え、次の仕事にも挑戦できるようになりました。



バックオフィスから現場を支える大平さん▼

――最後に、これからどんな職場を目指しますか。

山田　どの仕事も最初から完璧にできる人はいません。分からないところから始めて、みんなで支え合い、教え合いながら身につけていくものだと思います。やる気がある人が、安心して挑戦できる職場でありたいです。

大平　「自分には無理」と決める前に、一度やってみる。その一歩を周りが支えてくれる環境があれば、できることはもっと広がると思います。

波潟　現場を管理する人は男性と決めつける必要はありません。大切なのは、その人が何をしたいのか、何ができるのかを見ること。可能性を感じたら、会社も経営者も考え方を変え、挑戦できる環境をつくっていく。そうしながら、一人ひとりが力を発揮できる会社にしていきたいです。



現場で活躍する山田さん▲

――新しい仕事に挑戦する人を、どのように支えていますか。

波潟　本人の希望を聞くことを大切にしています。「この人には、この仕事は難しそう」と最初から決めるのではなく、どうすればできるのかを一緒に考え、適材適所で役割を決めています。

山田　興味があれば挑戦してみる。やってみて難しければ、また相談する。そういう選択肢があることが大切だと思います。

――挑戦を支えるために、環境面で変えたことはありますか。

波潟　働く人が安心して力を発揮できる環境を整えることも、会社の役割だと考えています。女性が安心して活躍できるよう、特別休暇などの制度を整えるだけでなく、女性専用の休憩スペースを設けたり、現場のトイレを男女別にしたりと、働く環境も見直してきました。

大平　環境が整うことで、「やってみよう」と思える人も増えると思います。私自身、最初は不安でしたが、教えてもらえる環境があったから今があります。次のステップに挑戦できることは、大きな支えになります。



INFORMATION

気付いた、その先へ
「本当に、そうかな？」を映画でも。

映画「ズートピア」では、「ウサギは警察官には向いていない」「キツネは危険な動物だ」というように、動物の種類によって相手を判断する「決めつけ」が描かれています。これは「男だから・女だから」という性別による思い込みとは異なりますが、「○○だから、きっとこうだろう」と、相手の属性だけで判断してしまうという点では共通しています。

私たちも、性別だけでなく、「若いから」「高齢だから」「この仕事だから」「この見た目だから」など、さまざまな情報から相手を判断することがあります。だからこそ、「本当にそうかな？」と、一度立ち止まって考えることが大切です。

映画を楽しみながら、自分の中にある「こうだろう」に気付き、相手を見る視点を広げてみましょう。

公開10周年！ **映画「ズートピア」上映会**

申込みはこちら▶

日時	12月12日㈭10:30～12:30（10:00入場）
定員	600人（未就学児は保護者同伴）
その他	無料、一時保育サービスあり
会場	燕市文化会館
申込	12月10日㈬までに申込フォームにて（定員に達し次第締切）
問合せ	地域振興課 協働推進係☎77・8361